

20021

血栓性急性心筋梗塞症に対しパーフュージョン型バルーンが有用であった1例

¹東京警察病院、²東京警察病院

椎原 大介¹、小机 由実¹、湊 久利¹、春田 裕典²、金子 光伸²、新田 宗也²、野崎 みほ²、鈴木 将敏²、笠尾 昌史²、白井 徹郎²

【背景】パーフュージョン型バルーンは2011年に再発売され、主に冠動脈形成術中に起こる冠動脈損傷に対し使用されているが、多量な血栓症に対する有用性は明らかではない。今回我々は、血栓性急性心筋梗塞症に対し、パーフュージョン型バルーンを使用し良好な結果を得られた症例を報告する。

【症例】32歳男性。深夜に胸痛を自覚、翌朝他院を受診し急性心筋梗塞の診断で当院に救急搬送。冠動脈造影の結果、左前下行枝近位部に完全閉塞を認め、緊急冠動脈形成術を行った。まず血栓吸引を行ったところ、血流はTIMI1に改善した。IVUS・OCTにて病変評価を行ったところ、血栓が主でありプラークはほぼ認めなかった。若年であることも考慮しステントを留置しない方針とした。パーフュージョン型バルーン「Ryusei」（カネカメディックス社製）を使用し、4分間拡張を2回行ったところTIMI3を得た。残存血栓はあるものの、IABPを留置し手技を終了とした。第8病日に、冠動脈造影を行ったところ造影上血栓は消失しており血流も良好であった。IVUS・OCTも血栓は認めなかった。経過は良好で第12病日で退院となった。現在も、イベントなく外来にて治療中である。

【結語】血栓が主体の病変に対し、パーフュージョン型バルーンによる治療の有用性が示唆された。